維新史回廊だより



編編 集 維新史回廊構想推進協議会

(山口市滝町一—一)TEL(〇八三—九三三—二六二七) 行 山口県総合政策部スポーツ・文化局文化振興課

維新史回廊だより第 岩国徴古館の松岡智訓学芸員に解説をお願いしました。 一八号をお届けします。「幕末と岩国のかかわり」

幕末と岩国のかかわり

Q 当時の長州藩における岩国の立場は、どのようなものでしたか?

川家では家格を上げる運動がおこなわれるようになりました。そして、四代 他国、毛利家の他の支族との関係において、不都合な面も多かったため、吉 ていました。しかしながら、二代の広正以降、吉川家は官位を与えられず、 ら現在の岩国市周辺を与えられたのが、初代岩国領主の吉川広家でした。広 広紀が元禄九年(一六九六)に萩で急死した 徳山藩、清末藩の三支藩とは区別されるようになりました。これは、幕府や また、代が替わるにつれ毛利家の家臣として扱われるようになり、長府藩、 家は、毛利元就の次男吉川元春の子にあたり、城主格として官位も与えられ 慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦いの後、宗家である長州藩主毛利家か

国では家格上昇を目的とした運動に対し、 ですが、幕末の動乱がその後の岩国の歴史に す。このような少し変わった歴史を持つ岩国 じて、岩国の歴史に大きな影響を残していま 汚職事件の原因にもなるなど、江戸時代を诵 れにより、家格運動が領内の経済を圧迫し、 くの予算が投入されるようになりました。そ 毛利家との関係はさらに疎遠となり、岩 多

た花押入り茶器

(吉川史料館蔵)

第18号 2012年 9月発行 年2回発行

おいても大きな変化をもたらすこととなります。

記文を作るなど、互いに親睦を深めます。嘉永六年(一八五三)六月三日の ペリー来航以降、国内の情勢が変化していく中、宗家である毛利家を中心に の別邸(花江亭)で、敬親から掛け軸や茶器が贈られ、経幹は額字を書き、 かれて萩に行き、一七日、敬親の接待を受けました。また、二二日には敬親 族が団結していく必要性が高まってきたことが、一時疎遠となっていた両 安政三年(一八五六)九月、岩国領主吉川経幹は長州本藩主毛利敬親に招安政三年(一八五六)九月、岩国領主吉川経幹は長州本藩主毛利敬親に招

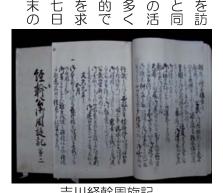
Q どのようにして岩国は幕末の政局にかかわるようになったのでしょう

家の関係を変化させ始めたといえるでしょう。

も長州藩は何度も使者を岩国へ派遣し、報告と意見聴取をしています。 ました。長井は上京前に岩国を訪れ、経幹に意見を求めたのです。それ以降 唱した航海遠略策を採用し、朝廷、幕府間の仲立ちと開国を進めることとし 演説したことが書かれています。これより先、同年三月、長州藩は長井の提 文久元年(一八六一)五月、長州藩直目付の長井雅楽が経幹のもとへ訪れ、 めた『吉川経幹周旋記』に詳しく記されていますが、その実質的な最初に、 幕末の政局と岩国のかかわりについては、経幹の政治周旋を編年体でまと

が攘夷の意向を示したことで、藩論を航海遠略策から攘夷へとすばやく転換 依頼を受け、京都で影響力を持つようになりましたが、文久二年、孝明天皇 今度は攘夷論の先頭に立つこととなりました。このような状況の中、文 長州藩は、 航海遠略策によって朝廷、幕府の双方から公武周旋の

様に扱うことを伝えます。これは、京都での活 政局に関わっていくこととなったのです。 に経幹は岩国を発って上京し、本格的に幕末の めていたともいえます。こうして、四月一七日 あった岩国への配慮であり、それだけ協力を求 の藩が集まる京都へ行くことに対して消極的で 動の重要性が増す中、家格問題を理由に、多く 久三年(一八六三)二月七日、敬親は岩国を訪 岩国を他の支藩 (長府、 徳山、 清末)と同



吉川経幹周旋記

Q 京都での吉川経幹の活動はどのようなものでしたか?

撃をしないように厳重注意を受け、経幹らを江戸に出頭させるよう命じられ 州藩が拒否したため、幕府との関係は悪化することとなります ました。この江戸召喚は、攘夷は朝廷の考えのもとにおこなったとして、長 ます。これにより、朝廷からは褒詞を受けたものの、幕府からはみだりに砲 月一日には二条城において将軍徳川家茂に謁見しています。一方、長州藩で の代わりに京都の警衛を命じられ、その後、堺町門の警衛につきました。六 は、攘夷期日と定められていた五月一〇日に下関において攘夷を決行してい 文久三年五月二日、経幹は京都の天竜寺に入り、帰藩した敬親の嗣子元徳

ど、長州藩の立場は一変します。それを受け、経幹は、清末藩主毛利元純や そして八月一三日、大和行幸の詔は下されましたが、一八日に会津藩や薩摩 納言から、「親征は天皇のお考えではあるが、行幸などについて粗暴の措置 益田以下の諸士と鷹司邸で会議をもつことにしました。そこへ勅使の柳原中 た三条実美など七卿は参内差し止め、長州藩は堺町門の警衛を解任となるな 訪れ、天皇自らが大名を率いて攘夷をおこなう攘夷親征の決断を仰ぎました。 七月一八日、経幹は長州藩家老の益田右衛門介らとともに関白鷹司輔煕を「あるものです」を持つの第一人のでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これの一般では、これのでは、これのでは、これでは、 中川宮などによる政変が起こり、大和行幸は延期され、攘夷を進めてい

> ついてのお考えは確かに変わらずあるの があることから、お取調べになる。攘夷に が伝えられました(『吉川経幹周旋記』)。 粗暴なことのないように」との天皇の考え で、長州藩はこれまで通りに尽力するよう に。また、多人数がいるため、くれぐれも



吉川経幹肖像画 (吉川史料館蔵)

たのです。 これを受けた経幹ら約二千人の長州藩勢は、 七卿とともに長州へ下っていっ

Q 政変後の上京について吉川経幹はどのように考えていたのでしょうか?

に同意している旨も伝えられましたが、経幹は反対を続けました。 で、しばらく上京を思いとどまり、様子をみてほしい。たとえどのような策 幕府も横浜港の鎖港についての談判を外国に対して進めようとしているの を考えると、平穏な入京はできず、万が一、憤りのあまりに武力行使で入京 り 周旋記』)。その後も本藩からの使者が経幹のもとを訪れ、他の三支藩は上京 略があったとしても、上京すべきではない。」と反対しています(『吉川経幹 となるかもしれない。幸い、天皇のお考えは攘夷から確かに変わっておらず、 するようなことになれば、勅命に違反することは明らかで、長州藩の一大事 月一八日に毛利一門の毛利筑前へあてた書状の中で、「現在の京都の情勢 政変の後、長州藩内では、挙兵して再び上京することを求める声が多くな 敬親は元徳を上京させることを決めました。しかし経幹は、文久三年一

=で元徳の上京が決まりました。しかしながら、その後も納得できなかった経 要請があったことから、経幹は山口へ向かいました。そこでも経幹は上京に 幹は三支藩の同意を得て、山口に集まることとしました。そして、六月二一 反対をしましたが、敬親の意向は変わらず、六月に入り、経幹が同行する形 元治元年(一八六四)五月二三日、敬親から山口に出てくるように再三の 経幹は山口に入りましたが、そのときには事態は大きく変わっていまし

岩国へ戻ることとしました。おり、経幹は思うところはありながらも、今さら意見をしても無益なため、と上京させる手配をしていたのです。すでに四陣のうち二陣までが出されてれたため、長州藩は福原越後、国司信濃、益田右衛門介の三家老と諸隊を次々た。六月五日、京都で池田屋事件が起き、長州藩士が新撰組によって襲撃さ

徳と経幹は長州へ引き返しました。経幹の不安は現実のものとなったのです。ましたが、一九日、京都で禁門の変がおこり、長州藩敗退の報せを受けた元その後、七月一三日に元徳が上京をはじめ、経幹も一五日に岩国を出発し

Q 第一次長州征討で吉川経幹のはたした役割とは?

フランス、オランダ)からの攻撃への対応にも苦慮していました。日と定めました。また当時、長州藩は、四国連合艦隊(イギリス、アメリカ、尾張藩主徳川慶勝は大坂城で軍議をひらき、一一月一八日を長州藩攻撃の期なし、七月二三日、朝廷から長州征討の勅命を受けました。征長軍総督の前禁門の変で御所に発砲をしたことから、幕府は長州藩を朝廷に背く敵とみ

れを承諾しました。

敬親は経幹へ使者を送り、朝廷、幕府へのお詫びの周旋を依頼し、経幹はこうに」との意見を伝えました(『吉川経幹周旋記』)。それを受け、八月六日、違えて暴動に及んで起こったため、三人を処分し、朝廷に申し開きをするよこのような危機的状況の中、長州藩では敬親父子を中心に対応が協議され

しています。なお、その間も長州藩内は、一意恭順を主張する保守派と武備ずに長州藩内で決着をつけさせる方が良いと考えていたことも大きく影響追い込むのではなく、岩国や徳山などを説得することによって、一兵も失わざと交渉し、三家老を処分して幕府に恭順の意思を示すことで、攻撃を延期経幹は、広島藩や福岡藩、征長軍総督の慶勝や参謀の薩摩藩士西郷隆盛な

した。経幹の周旋活動が実を結び、長州藩は危機的状況を切り抜けたのです。いた長州藩への攻撃は延期されました。その後、敬親父子の謝罪書、五卿のと益田が、一二日に岩国で福原が切腹したことにより、一八日と定められてと益田が、一二日に岩国で福原が切腹したことにより、一八日と定められてと益田が、一二日に岩国で福原が切腹したことにより、一八日と定められてとがたり、一二日に岩国で福原が切りではます。そして、一一日に徳山で国司志順姿勢を貫くことを主張しました。攻撃期日が迫った一一月四日、西郷は赤順を説く革新派が対立していましたが、経幹は敬親に対し、国境に兵を出

Q 第二次長州征討(四境戦争)の際、岩国はどう動いたのでしょうか?

きに対し、幕府は慶応元年(一八六五)四月、長州再征を決定しました。果、長州藩は武備恭順に方針を転換します。一方、長州藩の軍事力強化の動元治元年(一八六四)一二月一五日の高杉晋作の挙兵にはじまる内乱の結

長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、長州藩では、長州再征への対策として兵制改革や防備の強化をおこない、大戦の準備を整えました。

慶応二年(一八六六)六月七日、幕府軍艦の大島郡砲撃によって四境戦争

の幕府側は戦機を失い、その後の戦いに敗北することとなります。と言うがら、岩国が最終的には幕府側につくと考えていたようです。これによく書かれています)。なお、開戦直前、岩国へ幕府陸軍奉行竹中重固の家臣く書かれています)。なお、開戦直前、岩国へ幕府陸軍奉行竹中重固の家臣に、芸州口の戦いについては、「維新史回廊だより」第二、三、五に詳しが始まり、一四日には、岩国兵が配置されていた芸州口の戦いが開始されまが始まり、一四日には、岩国兵が配置されていた芸州口の戦いが開始されま

Q 四境戦争の際、岩国兵は活躍したのでしょうか?

の、六月二二日からは、遊撃隊総督の毛利親直が指揮することとなりました。近になったため、芸州口の主力であった遊撃隊参謀の河瀬安四郎の願いによいました。当初は経幹が指揮していましたが、戦場が岩国から離れて大野付芸州口には、遊撃隊などの諸隊を含めたと長州藩軍と岩国兵が配置されて



軍を待つわけにもいかないため、陸から進軍する覚悟だが、途中で分断され乱暴をはたらく者が多いのかと残念に思う。」とあり、また、一六日には「海類などもことごとく奪い取るため、岩国へもこれから伝えなければならないの上から発砲するだけで、必要以上には撃たず、矢が届く距離にも出ない。六月一四日の戦いでは、「岩国兵の粗暴さが度をこえており、戦闘中は山

「できないためにも、もう一大隊派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もう一大隊派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もう一大隊派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もう一大隊派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もう一大隊派遣してほしい。ことがわかります。また、ガ月二五日には「このたびの戦いででありに先鋒を望むほど士気も高く、現在は長州本藩の者よりも扱いやすくしきりに先鋒を望むほど士気も高く、現在は長州本藩の者よりも扱いやすくしきりに先鋒を望むほど士気も高く、現在は長州本藩の者よりも扱いやすくしきりに先鋒を望むほど士気も高く、現在は長州本藩の者よりも扱いやすくしきりに先鋒を望むほど士気も高く、現在は長州本藩の者よりも扱いやすくと記されているが、となり、大月二〇日には「このたびの戦いで、現在は不満のない状況である。また、万月二五日には「このたびの戦いでは、経幹様の親切さをかたじけなく思う。」とあり、戦いの中で徐々に長岩国兵が格別に勇猛に進軍したことは意外だった。岩国から色々な心遣いがないためにも、もう一大隊派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もう、社会は、大阪派遣してほしい。これは岩国兵が進軍することがないためにも、もっとは、大阪派遣している。

Q その後、岩国はどうなったのでしょうか?

日本国内が、大政奉還、王政復古によって新しい時代を迎えようとする中、日本国内が、大政奉還、王政復古によって新しい時代を迎えようとする中、日本国内が、大政奉還、王政復古によって新しい時代を迎えようとする中、

す。どうぞ御期待ください。回廊だより」で検索)で御覧いただけます。次号は来年3月発行の予定で回廊だより」で検索)で御覧いただけます。次号は来年3月発行の予定で県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ(「維新史無新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、